

## 早春の 珠洲から



特定非営利活動法人  
能登すずなり  
理事長 重政 靖之

三月の中旬から、家の周りで羽の鳴が鳴り始め、田に躰りが綺麗になり、奥能登珠洲に春の到来を告げています。桜の開花にはまだですが、日毎に春の息吹を感じる頃になりました。

さて、昨年の珠洲は九月、十月の二ヶ月に渡り「奥能登国際芸術祭2020」が開催されましたが、残念なことに新型コロナウィルスの蔓延により、実質十月だけの開催に終わりました。そのため、鑑賞に訪れたお客様も五〇、〇〇〇人程と、前回に比べ大変少なり数となりました。

しかし、このコロナ禍の中で開催を考えれば、よくぞこれだけ県内外から訪れていただいたと驚いております。おかげさまで「すずなり」も前回の芸術祭に近い賑わいがあり、従業員一同々に充実した日々を送りました。

年が明けてからは週末ごとに寒波が訪れ、目に見えて客足が遠のいてしまったが、二月に



上戸町山下家

ドでの修学旅行誘致など、珠洲市の新たな魅力を発信しながら、珠洲・奥能登のファンを増やしていきますので、今後とも皆様方の温かなお力添えをお願いします。

### ◆奥能登の

#### 主な春の行事、イベント

- 4月23日(土)  
道の駅すずなり12周年祭
- 4月1日～6月末

- 珠洲まるかじり・海藻編

- 4月下旬から5月上旬

- ノトキリシマオーブンガーデン

- 4月25日(月)から5月10日(火)

- 大谷川鯉のぼり川渡し

- コロナ禍の中ではありますが、早

- いと驚いております。おかげ

- さまで「すずなり」も前回の芸術祭に近い賑わい

- があり、従業員一同々に充実した日々を送りました。

三月初めには、埼玉県から修学旅行の受け入れもいたしました。現在、四月、五月と修学旅行の予約が入ってきています。その修学旅行の体験プログラムは珠洲独自のもので、SDG、Sに関するプログラムです。

珠洲市は早くからSDG、Sの未来都市に認定され、ラボも設置されています。その状況と自

然豊かな環境の中で、持続可能な未来について学習するプログラムに関心が寄せられています。

私は東京で長く住み、椿の伊豆大島と係わりがありました。これが、徳保の椿に寄せるよすがとなつたのであります。半島北端近くに椿展望台がある。ここから遠望すると、そこはかとなく懐かしく心緩やかになる。この海岸一帯に群生する徳保の千本椿は能登へ春を呼ぶ開花宣言なのだと言う。

こらむ

アイデノティティ 52

花に心を寄せ 神聖なる花椿

椿の分布は九州、四国、本州と北上し北限は青森内の椿山に至る。つやのある葉の木という意味でツヤハギが語源などと諸説ある。生命力が強く、日本では庭木の王と言われ樹形、葉状の美しさから神聖なる木とみなされた。一方で花全体がぱつたり散り落ちるので縁起が悪いとも言われる。

ところで、奈良高円山の西麓に建つ白毫寺境内に一本の五色椿があり、私が訪れた時宝蔵に鎮座する閻魔王座像が眼光鋭く口を開いて五色花の内面世界を見よとの迫力を感じさせられたのであつた。椿は万葉集に謳われ、芭蕉も「やぶ椿かどは時のわかばな」と詫びた風情の景色の花として描いている。またヴエルディ作オペラ『椿姫』は椿ブームを背景に登場する作品である。

私にも原点となる記念碑的な八重椿がある。生家の路地石垣角際に根元の幹から五、六本の樹冠を広げ、村の子供を馬乗りさせ遊びこけさせた巨樹である。

冒頭の木の浦では毎年『椿フェスティバル』が開かれると聞く。住民が楽しみ喜び合えれば観光は風評で満ちるであろう。

能登にお越しの際は、道の駅すずなりにお立ち寄りください、能登のお土産、匂なぶる里情報を提供いたします

(押上武文(府中市) 宝立町出身)

# 寄稿 特別能登と「伝統的酒造り」

(元飯田高校同窓会東京支部長)  
表 久雄

文化審議会はユネスコの無形文化遺産登録候補として、「伝統的酒造り」を選んだという（二〇二二年二月二六日付朝日新聞朝刊）。

少し古い話だが、能登町の広報・二〇二〇年一月号の「まちの出来事」の欄に「今季も酒造りを祈る」との見出しで、こんな記事が載っていた。

「杜氏組合の皆さん、日本酒の本格的な仕込みシーズンの到来を前にして、地元の氏神さまに、酒造りの成功と作業中の安全を祈願して、例大祭を行った」

秋の農作業が一息つく頃、能登の男にたちは、全国各地へ酒造りの出稼ぎに出る用意をする。「伝統的酒造り」には、農家

の男たちの知恵と汗の歴史が凝縮されている。

能登は祭り天国だ。集落の規模からみて、とんでもない馬鹿でかい「キリコ」（灯籠のお化け

みたいなもので、担いで練り歩く）や山車が、何台も出る。百人くらいの担ぎ手が要るキリコさえある。

祭りの日には「ヨバレ」といつて親類縁者や知人を呼んで酒を出してごちそうをする風習がある。

日本国は未成年者の飲酒はさまたに、酒造りの成功と作業中の安全を祈願して、例大祭を行った

いを頼む。こうして、祭りの折に、未成年ながら酒を覚える。

日本酒には、ふさわしい「肴」が必要のだが、能登は海の幸が豊かだ。

料理の王様は、なんといつても、新鮮な近海の魚の刺身だ。

あの、冷蔵庫もなく、氷もままならないなかつた時代に、真夏のお祭りにも新鮮な刺身を並べたはずだ。

能登は輪島塗の産地。

どこの家でも、「ヨバレ」には、輪島塗の朱色の御膳の上に、輪島塗の食器で料理がならべられる。

ユネスコの無形文化遺産登録には「その土地の歴史や生活習慣などに深く根ざしていること」が必要なのだが、この「ヨ

バレ」を見てもわかるとおり、能登の「伝統的酒造り」は、ピタリだ。先の朝日新聞の記事も「酒そのものは日本人の社会的慣習や儀式、祭礼行事に深く根ざしているからユネスコへの提案は適切だ」と書いている。

ユネスコの無形文化遺産登録だけを見ても、これまでに、二〇〇九年の「奥能登のあえこど」をはじめとして、来訪神・仮面・仮装の神々の「あまめはぎ」、七尾の青柏祭などが登録されてきた。

早くから、日本酒を覚え、ほぼ七十年、日本酒に親しんできたものとして、能登の先人たちは、まことに、こころ豊かな文化を残してくれたものだと思う

のである。（二〇二二・二・二六）

# 能登の天花を見に来てください! のとキリシマツツジオープンガーデン

1本の立木で数千もの深紅の小花を咲かせるキリシマツツジ。

端正な美しさと品格を備えた能登の天花「のとキリシマツツジ」の季節となりました。

奥能登(珠洲市、輪島市、能登町、穴水町)では、樹齢100年を超えるのとキリシマツツジの古木が500株以上あります。愛好家が年間を通じて大切に手入れして深紅の花を咲かせます。咲き誇る邸宅の庭などを開放して、自由に見学できる「のとキリシマツツジオープンガーデン」が実施されます。

■公開期間：2022年4月15日から5月中旬頃 ■場所：奥能登地域の個人や施設のお庭68か所

特選プレゼントが当たる「のとキリストンプラリー」初開催 パンフレットやスタンプラリー台紙は、奥能登の道の駅などで配布

■主催：奥能登ウェルカムプロジェクト推進協議会 ■問い合わせ先：奥能登総合事務所 企画振興課 TEL 0768-26-2303

立寄り下さい。

2006(平成18)年、石川県の「天然記念物」の指定を受け、地元の方々と一緒に剪定・雪吊り作業等、管理に努めています。

5月10日前後が見頃です。どうぞ、気軽に

2006(平成18)年、石川県の「天然記念物」の指定を受け、地元の方々と一緒に剪定・雪吊り作業等、管理に努めています。

当家は、珠洲市の外浦、大谷町の国道249号線から車で10分位の山間部に所在し、裏庭にのとキリシマツツジの古木4株があります。

先祖が、明治初期に植え付け、代々守り続け

てきたもので、樹齢300年以上の古木です。

根本から10本前後に分岐、樹高35~4m、枝張り3~5mです。家族写真の背景をご覧ください。

## 池上家ご当主 池上権八氏からのメッセージ



石川県珠洲市大谷町 57-33 携帯／090.1665.5720

## 『大谷のとキリシマツツジ』

江戸時代、全国的にツツジの栽培が盛んとなった際に、九州南部などから能登に伝えられたキリシマツツジが、能登の厳しい風土にあわせて変異し、今日では九州南部のキリシマツツジとは、花の大きさや形状などで、異なる特徴をもつに至ったと考えられている。開花時期は、5月上旬から中旬であり、鮮やかな深紅色や紫色の花が能登の山野を華やかに染めあげる。

「のとキリシマツツジ」は、成長が極めて遅く、長い年月をかけて能登の人々が大切に守り育てた花である。「大谷のとキリシマツツジ」は、歴代の所有者が大切に守り育ててきた、能登地方を代表する優れた樹形をもつ名木である。(石川県指定天然記念物の解説から)

## 首都圏行事のご案内

5月4日(水)・5日(木)▶仲町マルシェ 能登物産展:横浜・鶴見仲通り商店街

5月18日(水)~24日(火)▶金沢物産展:CELEO国分寺

5月26日(木)~6月1日(水)▶石川の工芸と銘菓フェア:京王聖蹟桜ヶ丘店

2024年夏  
さいはて

# 奥能登珠洲 映画祭開催へ

さいはて奥能登珠洲映画祭

実行委員 中川千英子

(金沢市出身・東京在住)

「スメル館」と聞くと、懐かしく思われる方が多いのではないか? 昭和の頃に珠洲の飯田で営業していた映画館は、今も建物が残っています。

私がスメル館を知ったのは2014年秋。金沢生まれの私は大学進学を機に上京し、今も東京で映画やドラマの脚本家として生活しているのですが、ある日、同じく金沢から上京して東京で働いている人から「珠洲に行つたときに、昔はスメル館つて映画館の映写技師をしてたりいう人と話をしたら、すく面白かったよ」と教えてもらいました。

興味が湧き、その、一週間後には珠洲に行つて、民宿を経営されている元映写技師の今井さんにお会いして、お話を聞かせていただきました。昭和30年代から40年代にかけてのスメル館は、館内に出前のうどんの匂いや煙草の煙が立ち込め、二階は棧敷席。盛り上がりとスク

リーンに向かつて声援を贈る人や指笛を吹ぐ人もいた等々、お聞きしてみると当時の様子が目に浮かぶようでした。

今井さんに限らず、珠洲でお会いした方々がスメル館での思い出をたくさん聞かせてください



ありました。監督は、私と同じく金沢出身の今井和久監督。映画『旅立ち～足寄より～』、『ドリマ『チームバチスターの栄光』等、ヒット作を数多く手掛けられたゲートワゴン監督です。

また、「県内外のみなさんが奥能登の魅力を知り、訪ねてきてくださるようなイベントも企画してほしい」との声もいただき、2024年夏(予定)には、「さいはて奥能登珠洲映画祭」を開催し、そのオープニング作品として映画『すずシネマパラダイス』を上映予定です。映画祭実行委員会の代表は今井和久監督で、私も実行委員の一員です。

さいはて映画祭のテーマは「持続可能な暮らしと多様性」。世界中で多くの人が不安や恐怖を抱えて日々を過ごしている今、SDGs未来都市・珠洲で映画の魅力を味わっていただき、「持続可能な暮らしと多様性」というテーマについて考え、語り合つことは、人と人との互いを尊重し、理解を深めていくとともに繋がるはずです。楽しく、且つ社会的意義もある映画祭にしたいと考えてます。

奥能登の魅力を全国に、そして世界に届けるべく、鋭意準備を進めていますので、応援していただけたら嬉しいです。映画祭開催時には、ぜひ珠洲でみなさんとお会いし、映画『すずシネマパラダイス』をご覧いただきたいと願っています。

その後、以下に書ききれない程の紹余曲折が執筆しました。

映画祭開催までの道のりは、主に公式noteで発信してまいります。さいはて映画祭公式note <https://note.com/okunotocinema>  
お問い合わせは、こちらまでお願いいたします。Eメール:okunotocinemafestival@gmail.com 電話:080-3090-2055(映画祭実行委員・中川)

## 事務局から

木ノ浦海岸徳保の千本椿に言及した本号コラムに触発されて、ヤブツバキの北限を調べたところ、青森東津軽郡平内町と秋田県男鹿半島の能登山の2か所に広がる自生群が北限として天然記念物に指定されている。男鹿市の「能登山」の由来が、能登から来た若い男と地元の娘との悲恋の民話に“椿は能登の男の生國からもたらされた”とあった。どれ、秋田男鹿に出かけてみましょうか。

[東京奥能登応援団] 代表/光眞 章 副代表/下平 康次

